

笑学百科

小林信彦



新潮社

笑学百科

小林信彦

新潮社

しょうがくひやつか
笑学百科

定価 七八〇円

発行 昭和五十七年一月二十五日

五刷 昭和五十七年四月十日

著者 小林信彦（こばやしのぶひこ）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

100 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話 業務部 03(266) 五二二 編集部 (266) 五四二一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂



© 1982 Nobuhiko Kobayashi, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

笑学百科 ■ 目次

ザ・ぼんちと伝統芸	8	欽ちゃんとの会話	34
〈ギャグ〉という語の誤用	10	常識と奇行	36
大阪の寄席	12	ギャグと奇行	38
いかりや長介の想い出	14	清順さんのかくしギャグ	40
ビートたけしの猛毒的DJ①	16	元祖猛毒	42
ビートたけしの猛毒的DJ②	18	志ん朝さんとの一夜	44
ビートたけしの猛毒的CJ③	20	古典のない世界	46
眠らない男	22	めがねちがい	48
大阪の生き字引	24	物真似について①	50
真説・ツッコミとボケ	26	物真似について②	52
〈漫才人間〉と〈役者人間〉	28	物真似について③	54
シャレが通じない……①	30	リッチ・リトルでリッチな気分	56
シャレが通じない……②	32	江戸前のさりげなさ	58

スタンダップ・コミック	60	気むずかしさのすすめ	86
ふたたびスタンダップ・コミック	62	回想の「シャボン玉ホリデー」	88
またたびスタンダップ・コミック	64	新・悪魔の辞典①	90
〈喜劇の時代〉?	66	新・悪魔の辞典②	92
私版〈思想のない歌〉	68	なぜ、いま、へ山寺の和尚さん? か?	94
ほんものの自伝	70	ギャグの天才	96
あんこーる	72	ホンモノか、ニセモノか?	98
ギャグなりがたし	74	ホワイト・ユーモア	100
ギャグを書くな!	76	流行語①	102
ホラ吹き大行進①	78	流行語②	104
ホラ吹き大行進②	80	代表作を残すが勝ち	106
偉大なるワンパターン	82	〈浅草の灯〉という幻想	108
五代目古今亭志ん生	84	ギャグ娘	110

演出①	112	芦屋小雁はどうこわいか？	138
演出②	114	微妙な言葉	140
キャンプ・ユーモア	116	〈通人〉	142
ウディ・アレンの奇想小説	118	喜劇映画の手本①	144
ウディ・アレンの日本映画	120	喜劇映画の手本②	146
影響	122	七年目の「熱海殺人事件」①	148
挫折とあこがれ	124	七年目の「熱海殺人事件」②	150
花冷えの夜の落語	126	血液型調査（A型）	152
志ん朝七夜	128	血液型調査（O型・AB型）	154
もう一つの「寢床」	130	血液型調査（B型）	156
笑うピアニスト	132	ニューヨークの植草さん	158
昭和モダニズムのルーツ	134	渋谷の植草さん	160
ツービート論争	136	誤解ギャグ	162

遊びの素養

164

スラップスティック・イン・NY ①

166

スラップスティック・イン・NY ②

168

ブロンクスの動物園

170

「殺しのドレス」と遊び

172

喜劇映画の教科書

174

前略、NHK様……

176

百鬼園先生の礼儀作法

178

ふりだしに戻る

180

大阪・八方ならみ ①

182

大阪・八方ならみ ②

184

「上海バンスキング」 ①

186

「上海バンスキング」 ②

188

一冊の本Ⅱ「落語鑑賞」

190

ギャグ娘 2

192

腰から下の線

194

深夜放送ことはじめ

196

三木鶏郎の人脈

198

芸名と本名

200

〈えせインテリ〉について

202

〈パロディ〉という語の誤用

204

一九八一年六月のノート

206

ふいなーれ

208

人名索引

215

挿 装
画 幀
峰 平
岸 野
甲
達 賀

笑学百科

ザ・ぼんちと伝統芸

正月過ぎに、レコードを買いに街へ出た。

のちに大ヒットとなった「恋のぼんちシート」であるが、そのときは、もちろん、知る由もない。週刊誌のヒットチャートの中にも曲名がなく、ぼくの頭の中には、へザ・ぼんちのレコード〜ということしかなかった。

漫才師の余技のレコードは意外に多いもので、とくに大阪の漫才の人は、よく歌を吹き込む。東京では売っていないが、大阪ミナミの小さなレコード店で見かける。

ザ・ぼんちのレコードは、その種の余技ではない気がした。ラジオのスポットコマーシャルで耳にしただけが、要するに、今様の作り方^{いまよう}をしている。

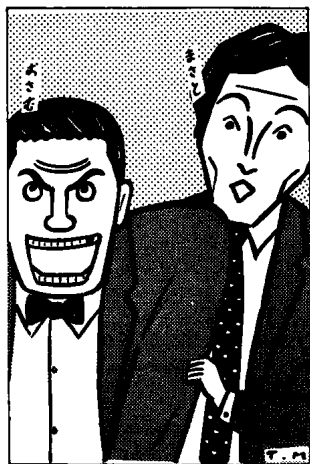
まず、デパートのレコード売り場——なし。

次に、レコード専門店——なし。

いったい発売されているのかどうか、わからなくなった。といって、きいてみるのも、恥ずかしい。

——あの……ぼんちのレコード、ありますか？

——ぼんち？



——漫才のザ・ぼんちですけど……。

と、たぶん、こんな会話になるのではないか、とおそれて、C地点に向った。

渋谷の紀伊国屋書店のレコード売り場。

おどろきましたな。今を時めく近藤真彦の「スニーカーぶるーす」に次いで、二位が「恋のぼんちシート」。しかも、ボックスの中に、三枚ぐらいしか残っていない。

（これは、もう、余技どころじゃない）と、正直、ドギモを抜かれた。二位というのは凄い。かなり有名な歌手がレコードを出して、百位に入らないことだってあるのだ。

（都会では楽勝だな）

と思った。

家に帰って、レコードを見ると、作詞作曲・近田春夫とある。

「恋のぼんちシート」というけつたいなタイトルは、近田春夫がジューシー・フルーツのために作詞した「恋はベンチシート」のもじりとわかった。本家のほうが売れずに、もじりのほうが売れてしまった珍ケースである。

やがて、「恋のぼんちシート」はヒットチャートを急上昇して、ザ・ぼんち（左側の人はジェリー・ルイスによく似ている）は、音楽番組に片づけしから出るようになったが、番組によって歌詞を即興的に変え、必ず、番組名を入れて、笑わせる。

考えてみれば、この演じ方は、近代的しゃべくり漫才が確立されるはるか前の古典的「万才」のリバイバルではないか。音楽が洋風になり、テンポが早くなっただけで、即興的な歌詞で笑いをとる伝統的な万才の芸に非常に近いのではないか。

もつとも、それが計算によるものか、偶然かはわからないが——まあ、偶然でしような。

「ギャグ」という語の誤用

ギャグとはなにか？

答え——ギャグである。

手もとの国語辞典によれば、「演劇・映画などで観客を笑わせるために言う、シャレやコツケイな台詞」とある。

これだけでは、ちょっと、物足りないのです、べつな辞典をひもとく。（映画・演劇などで）見物を特に笑わせるために、筋の進行のあいだに入れる台詞や動作」。

この方がやや正しい。台詞だけでなく、「動作」とあるからだ。

つまり——チャップリンのズボンがだんだん下下ってきたり、ロイドが眼鏡（レンズが入っていない）ことを観客が承知している）をふく真似をしたりするのがギャグの初歩である。

また、森繁久彌が映画のカメラ（つまり、観客）に向かって、「やだねえ！」と呟いたりするのも、ギャグである。

こんな風にあまりにも幅が広い言葉なので、専門的には、

サイト（Sight）・ギャグ



バーバル (Verbal) ・ギャグ
という風に分類されている。

前者は、視覚的なギャグ (動作のおかしさもふくむ) であり、後者は言葉のギャグである。

なぜ、こんな初歩的なことを書くかというと、大阪の漫才師の中に、ギャグという言葉を (キャッチ・フレーズ) 〈流行語〉の意味に間違えている人が見られるからだ。

「今年こそ、ギャグを作りたい」

とか、

「ザ・ぼんちはギャグを持っているからうらやましい」

などと、発言する漫才師がいる。

これは、

「今年こそ、〈流行語〉を作りたい」

「ザ・ぼんちは〈流行語〉を持っているからうらやましい」

の意味なのである。

だいたい、漫才は、ギャグを連発しなくては成立しないのに、「ギャグを作りたい」などと言われると、がつくりくる。いま、もつとも面白いはずのオール阪神・巨人が「ギャグのヒットを出したいですわ」と語っていたが、実をいえば、大阪の〈漫才さん〉は、ぼん、全員、テクニカル・ターム (専門用語) を誤用している。ザ・ぼんちの、例の「そーオなんですよ」とか「ありい？」だけをギャグと信じているのだ。

むかしでいえば、伴淳の「アジャ―」とか、アチャコの「むちゃくちやでござりまするがな」

——これらはギャグというより、流行語、あるいは強烈なキャッチフレーズなのである。

仲間うちの符牒、あるいは、大阪弁の一種と考えれば、誤用も愛嬌のうちなのだが、全国向けの電波に乗せるからには、もう少し気をつけて欲しいと思う。

大阪の寄席

数年まえまでは、年に何回か、大阪へ行っていた。

たいていは、ちょっとした用があったのだけれども、たのしみにしていたのは大阪の寄席をのぞくことだった。

角座（^{かどざ}松竹芸能系）へ行ってみたら、お上りさん用の団体貸切で、入れなかったことがある。かりに入れたとしても、いつも面白いと限ったものではない。ひいきの漫才が出るまで、ぱっとしない漫才をいくつも我慢しなければならぬ。

そのころ、大阪の寄席の客の大半は年寄りであつたから、真つ昼間、そういう場所でボンヤリしている自分に不安をおぼえることがあつた。

（働きたい奴は働け）

と思つても、なお不安だつた。自由業者とか文筆業者といえ、きこえがいいが、じつは半失業者ではないかとさえ思つた。

こちらもぱっとせず、舞台の上の漫才もぱっとしない。吉本興業系の劇場での、ぱっとしない漫才の中にB & Bの名前があつたと記憶する。（いまのB & Bとは左側の人がちがつていたように思う。）



さいきん漫才が若者にウケるようになったなどと一部のマスコミが書くが、ひとむかしまえ、すでに中田カウス・ボタンは（大阪では）若い女の子に異常な人気があった。ある劇場で女の子の殺到を防ぐためのバリケードを見たことがある。

梅田花月で、乗りまくったやすし・きよしを観たあとの充実感といったらなかった。すでに真打になっていた二人は、客席と適当なやりとりを交しながら、のびのびと遊ぶ余裕があった。

大阪の寄席の面白さの一つは、漫才師A Bの対話（しゃべくり）もさることながら、客Cを巻き込んで、A B Cの三角形になって進行するところにある。これは、芸の在り方としては、たぶん、邪道であろうが、そのほうが面白いのだから致し方ない。

昨年一月に始まった〈漫才ブーム〉のおかげで、ぼくは大阪まで出かける必要がなくなった。

大阪の漫才師（この呼び方も、もう、適当でない気がするのだが）が全力投球する場所は東京の国立演芸場なのだから、これは、ある意味ではありがたいし、ラクである。

しかしながら、大阪の寄席に対して、熱っぽい思い入れをもつべくとしては、拍子抜けする事態であるのもたしかだ。

新幹線に乗り、ホテルに泊り、という、お金と時間をかけていたころのほうが、芸人のいる空間がありがたく見えたような気がしてならない。

それにしても、客とのやりとりのない、平面的な（？）漫才というのは、どうなのだろう？ まあ、遊びに手間ひまかけずに、テレビで観ながら、こんなことを言ったって仕方がないのだけれども。

いかりや長介の思い出

二月十九日の夜に、あるパーティーに出席していると、TBSにつとめているむかしの知人が、「うちは、ゆうべから大騒ぎだよ」とぼくに言った。

ドリフターズの二人がノミ行為（競馬法違反）で取り調べを受けた事件のことだった。たんに看板番組だからというだけではなく、四月以降に大きな影響を及ぼすらしい。いろいろな話をきいたが、ここに書くわけにはいかない。

ぼくはノミ行為というものがわからず、事件にも興味が無い。水割りを手にしながら、ぼんやりしているうちに、十数年前に、一度だけ、ドリフターズの台本を書いたのを思い出した。

ドリフターズが、まだ、それほど人気がなかったころである。

ディレクターはTBSの鴨下信一さんで、鴨下さんも、ぼくも、ドリフターズがどういう芸ができるかわからない。

ところが、ドリフターズにくわしいディレクターがいた。軽演劇ファンにはおなじみの脚本家・淀橋太郎氏の甥で、ドリフの十五分番組（があったのだ、当時は）の演出をしていた日向宏之さんに、いろいろ教えてもらった。

